



✧ 研究会報告 ✧

漢陽大学校東アジア文化研究所主催国際学術会議

「グローバル時代と東アジアの文化表象」参加記

富澤 達三（松戸市立博物館 学芸員）

はじめに

2015年2月6日（金）・7日（土）の2日間、韓国の漢陽大学校において、国際シンポジウム「グローバル時代と東アジアの文化表象」が行われた。私にとって初の韓国での発表である。発表内容は、以下の通りであった。

< 2月6日（金） >

①富澤達三（神奈川大学）「絵引研究」について 非文字資料からの歴史研究

討論：金容澈（高麗大学校）

②稲賀繁美（国際日本文化研究センター）「脱皮と変態 - 生皮を剥がれた《バッタもん》、グローバル時代の商標と複製権 -」

討論：朴昶建（国民大学校）

③中井真木（早稲田大学）「平安男性貴族の服装への眼差し」

討論：趙慶（高麗大学校）

④陸秀炫（ソウル大学校）「韓国画の誕生」

討論：金京妍（明知大学校）

⑤金昌民（昌原大学校）「沖縄の獅子信仰」

討論：陳泌秀（ソウル大学校）

⑥朴銀正（漢陽大学校）「近代以前の虎の象徴性と表象化過程の考察」

討論：朱榮兒（江原大学校）

全体討論 朴賛勝（漢陽大学校）

< 2月7日（土） >

⑦朴美貞（国際日本文化研究センター）「楽浪の発見とアジア主義」

討論：李松蘭（徳成女子大学校）

⑧全遇容（漢陽大学校）「市場へ出た宮中—韓国近代の遊興の誕生空間、明月館」

討論：李晋源（韓国藝術綜合学校）

⑨裴寛紋（翰林大学校）「日本の雅楽としての能の発見」

討論：金炳淑（韓国外語大学校）

⑩李京僖（漢陽大学校）「鹿鳴館の舞踏会—借りてきた「自己表象」」

討論：韓程善（漢陽大学校）

⑪朴奎泰（漢陽大学校）『『仮面の欲望論』による日本表象』

討論：朴種天（高麗大学校）

全体討論 朴賛勝（漢陽大学校）

発表は、韓国語・日本語の同時通訳が付き、内容の濃いシンポジウムであった。2日間でのべ60名の参加者があり、私の発表の際には、22名の方が聴衆として参加されていた。

発表の概要

私の発表では、前半は私が行ってきた近世図像資料研究について、後半では澁澤敬三の「絵引」研究、締めくくりとして神奈川大学が推進する「非文字資料」研究について述べた。

1. 時事を描いた錦絵をさぐる

江戸時代は「文書による支配」が全国津々浦々にまで及び、膨大な数の古文書が残った。一方、図像史料は、幕府の命で作られた国絵図からはじまり、民芸品の錦絵（浮世絵版画）や、絵心のある者が事件や景色を記録や楽しみのために描いた「素人絵」まで、やはり膨大な点数が残っている。

江戸時代の日本を代表する図像史料として、浮世絵が世界的に知られる。浮世絵は、厳密には肉筆画・版画・書籍の挿絵などの種類があるが、一般的には木版多色摺りの錦絵（浮世絵版画）が知られる。錦絵は、美人・役者・名所・花鳥風月などを描いたが、水野忠邦による天保改革の時代（1830～43年頃）、歌川国芳による諷刺

画「源頼光公館土蜘蛛妖怪図」(天保14年=1843)で「時事もの」のジャンルが大当たりした。時事ものは、当初は難しい謎解き絵の「判じもの」作品が主流であったが、のちに歌川国芳は大事件を「戯画的な表象」(現代でいうならばキャラクター的な絵)を使い、連作で発表する手法を定着させる。

安政2年(1855)10月2日の江戸地震直後から、数ヶ月間無検閲で出版された錦絵「鯨絵」は、地震鯨や鹿島神の図像を駆使して地震の守り札となる。地震終息後、鯨絵は戯画的になり、江戸の復興気分を後押しした。鯨絵は、オランダの文化人類学者コルネリウス・アウエハントの構造学的分析で注目され、日本の民俗的図像史料として有名となる。鯨絵以後、江戸と周辺地域の重大事件を、連作でわかりやすく描いた時事ものの錦絵は、一つのジャンルとして完全に定着したのである。

ところで、発表中「韓国のナマズ」について、会場の韓国の研究者の方々に質問してみた。すると発表後の懇親会で「韓国は地震が発生しないため、地震とナマズが結び付けられることは無い。ナマズは単なる食材である」との情報をいただいた。

2. 澁澤敬三の絵引研究

発表後半では澁澤敬三(1896~1963)の「絵引研究」を紹介した。澁澤が発案した「絵引=Pictpedia」は、『絵巻物による日本常民生活絵引』(1~5巻+総索引)として角川書店を経て、平凡社から新版が出た(B5判モノクロ)。

「絵引」研究メンバーは、澁澤家が所蔵する中世期絵巻の模刻本、所蔵無き作品は写真版から常民的な場面を選択し、画家(戦前は橋浦泰雄、戦後は村田泥牛)に精密な模写を依頼して検討用の図像を作成した。それを青焼きして番号を振り、事物や行為に注釈を付ける作業が行われた(「絵引によせて」前掲『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』第一巻、x~x iii)。

検討対象となった絵巻は、場面順ではなく「1 住居」「2 衣服」「3 食事」「4 調度・施設・技術」「5 資糧取得・生業」「6 交通運搬」「7 交易・交易品」「8 容姿・動作・労働」「9 人生・身分・病」「10 死・埋葬」「11 児童生活」「12 娯楽・遊戯・交際」「13 年中行事」「14 神仏・祭・信仰」「15 動物・植物・自然」の15項目を設定し、絵から場面を抜き出し並べていった。したがって短い絵巻物作品では、全項目が絵引できていな

い。巻末索引は、上記15項目を使い、事項(図像)を引くのに便利である。

「絵引」の実際を見ると、各図像を端的に示すタイトルが付けられ、600~1500字程度の文章で図像内容が説明されている。そして図像に事物説明用の算用数字、行為の説明用に○囲み数字が振られている。事物や動作の呼称は、事典類・記録などを調べて決め、不明ものは止むなく一般的な総称とされた(図1)。



図1 『新版 絵巻物による 日本常民生活絵引き』1巻、61頁を一部加工

澁澤によるユニークな絵引研究の継承は途絶していたが、2003年に神奈川大学の「人類文化研究のための非文字資料の体系化」が、文部科学省21世紀COEプログラムとして採択され、澁澤の「絵引」研究を受け継ぐ作業が復活する。近世の名所図会、農業図絵、朝鮮中国の風俗画などが候補とされ、第1期の成果として、『日本近世生活絵引 東海道編』(2007年12月)・『日本近世生活絵引 北海道編』(2007年12月)・『日本近世生活絵引 北陸編』(2008年2月)・『東アジア生活絵引 中国江南編』(2008年2月)・『東アジア生活絵引 朝鮮風俗画編』(2008年3月)の5冊が出された。



3. 沖縄の絵引

2014年3月、「琉球交易港図屏風」「八重山蔵元絵師画稿」「琉球寫真景」を使った『日本近世生活絵引 奄美・沖縄編』が刊行される。三作品は19世紀後半から20世紀初頭の制作で、当時の交易・生活・民具などが描かれた図像資料である。前述の通り、近世日本社会が残した「絵」や「図」などの図像史料は、肉筆や木版印刷で複製されたものなど、膨大な数が残る。千葉正樹氏は『江戸名所図会』の挿図を分析し、「絵→図」への変化、さらには「図と絵の融合」で、近世の図像が大きく変化したことを論じた（『江戸名所図会の世界』吉川弘文館、2001年、93頁以下）。千葉氏は、近世の俯瞰図・鳥瞰図の視点は、以下の4つに大別できるとする。

- ①近景…対象から約10m以内の視点。人物の性別・老若・身分・職業・個々の容貌・着物の文様までもが精密に描かれる。
- ②中景…対象から数十m。男女や老若などは簡略化されるが身分の判別などは可能。顔の目鼻立ちは一本の線で描かれて容貌の判別はできない。
- ③遠景…対象から100m以上離れた視点。人物の身分や職業は、武士＝刀二本差し、といった類型表現で判断できる。顔は白抜きになる。
- ④超遠景…対象から数百m以上。広く景観を描き、建造物は簡略化され、人物は縦の短い線で描かれる。

管見の限り、澁澤が検討した中世の絵巻物は、「①近景」「②中景」視点の場面に集中している。発表では「琉球交易港図屏風」「八重山蔵元絵師画稿」「琉球寫真景」の三作品は、上記4つの視点に則り、かつ「絵と図の融合」した図像で景観や人々の生活・事物を描いた歴史資料であることを述べ、具体的な場面を数点選んで説明した。続いて、絵引作業は、図像全体の制作意図などを捉え、類似する他の図像資料との比較を行ったうえで、場面からの確に情報を読み取る必要があると指摘した。そして、各種の文献や同時代の史料を調べ、単独の研究者で行うのではなく、多くの専門研究者が共同作業で知識を共有し図像解釈の視野を広げ、独断的解釈を避けることで「絵引」が可能となることを述べた。

絵引研究と非文字資料研究のこれから

しめくくり、澁澤が絵引研究を行った時代には考えられなかった、大型カラーフィルムによる図像資料撮影、高解像度デジタル画像作成、それを拡大閲覧できる高性能パソコンを個人で使うことが容易になり、絵引研究が進めやすくなった現状を指摘した。そして、私（富澤）は、実際の絵引作業のなかで、澁澤が絵引研究に際して設定した15項目を明確に意識していなかったこと、作業のなかで、それらがはからずも盛り込まれる結果となり、あらためて澁澤敬三の図像資料を見る視点の鋭さ・明快さが再確認されたことを述べた。

最後に、画像資料自体を、場面も含めて厳密に解析する絵引研究は、ユニークな方法であり、神奈川大学は今後も作業を継続すると説明した。絵引研究は、神奈川大学が行っている多様な非文字資料を使った歴史・民俗研究の一部であり、かつ「非文字資料そのもの」の研究でもあること、図像資料だけでなく、民具・身体技法・建築物などを使った研究の成果は、出版物・シンポジウム発表以外に、Webで英語・中国語・韓国語など、多言語発信する予定であることをアピールし、発表を終えた。



発表の様子